



TITLE:

# 五代中原王朝の朝儀における謝恩儀禮について --正衙謝と中謝--

AUTHOR(S):

松本, 保宣

---

CITATION:

松本, 保宣. 五代中原王朝の朝儀における謝恩儀禮について --正衙謝と中謝--. 東洋史研究 2016, 74(4): 716-754

ISSUE DATE:

2016-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/240773>

RIGHT:

# 五代中原王朝の朝儀における謝恩儀禮について

——正衙謝と中謝——

松 本 保 宣

はじめに

第一章 唐代の謝恩儀禮と五代の朝儀

第二章 五代の任官謝恩儀禮

第三章 謝官の官職

第四章 中謝の場と實施頻度

おわりに

は じ め に

朝會儀禮は、皇帝と臣僚の間の階層秩序を視覺化し、身體的所作でそれを確認する、中國の朝廷にとっては極めて重要な儀禮である。そのうち日常的に舉行される「常朝」は、唐代でその存在を明確にするも史書に明記されず、正史の禮志などに項目が立てられるのは『宋史』卷一一六、禮志一九、賓禮一が始めてである。従って唐から五代にかけての制度形成過程が説明すべき問題として現れる。

筆者は先に唐王朝の朝會儀禮、特に常朝の制度について假説を呈示し、それに基づいて唐の制度が五代王朝に如何なる影響を与えたかについて基礎的な見解を發表した。<sup>③</sup>しかし、それは概略にとどまり、五代王朝が唐制を意識して朝會儀禮を實施した理由を、皇帝の權威を高めるためという、ある意味当たり前な結論を示すに止まった。

本稿では、前記の知見に基づいて、朝會儀禮の持つ意義の一側面について更に考察を加えたい。取り上げるのは、朝儀における新任官の謝恩儀禮である。周知の如く官僚に對する人事權は皇帝の大權として極めて重要なものである。皇帝權力の低下した五代にあつて、朝廷がそれに如何に對處したかを儀禮の一面から考察する。本來ならば、宰相・樞密使や藩鎮勢力などの權勢の推移とその職掌が問題にされるところであるが、これらについてはすでに先學によつて少なからず論考が發表されており、また、筆者のこれまでの唐代朝會儀禮に關する研究を五代まで含めて總括する必要性を感じているので、前述の如く儀禮の側面から考察する餘地があると思考した。<sup>⑤</sup>

また、筆者の先の考察では、唐代後半期から五代にかけて正殿（正衙）で、毎日朝參が行われていたが、實際には皇帝が出御しないことの方が多く、群臣は序班して退くという、一見無意味な儀禮が行われていたことを指摘した。これが五代にも行われ北宋に繼承されるのであるが、本稿は任官謝恩儀禮を通じて、そうした儀禮が皇帝權力の弱體化した五代で繼續實施された意義を考察したい。

節度使・刺史を中心とする地方官と中央政府の儀禮の様態については、五代後唐の『刺史書儀』をもとに吳麗娛氏が詳細な考察をすでに發表されている。<sup>⑦</sup>吳氏の研究は、唐末五代の皇帝の權威失墜とともに、敦煌地域など地方の藩鎮が「小朝廷」「小社會」を形成して、官僚社會に新たな儀禮が創出され、それが全國的に展開されることに解明の重點をおかれている。この點、唐から五代への朝儀の變遷に焦點をあてる筆者とは觀點が異なる。また、朝會儀禮の制度理解についても、筆者の理解とやや異なる點もある。<sup>⑧</sup>本稿は唐制の繼承と五代における制度の變遷を、時系列に従い考察することにより、吳氏の貴重な成果に何ほどか附け加えられることを期待して起稿した次第である。

## 第二章 唐代の謝恩儀禮と五代の朝儀

唐代、新任官が外朝や禁中で皇帝に謝恩する儀禮は二種類あった。<sup>①</sup>延英殿などの便殿で皇帝に拜謁する中謝と、<sup>②</sup>正殿の朝儀の際に舉行されるものである。<sup>①</sup>は密室で行われる親密な謁見で「中謝」と呼ばれ、皇帝が任官者の能否を自ら確認し、指示を下し、また、それによって既定の人事を覆すことさえあった。<sup>②</sup>は朝會儀禮の一環として行われるもので、儀禮的な拜禮であり、更にそれは、<sup>②</sup> a 紫宸殿入閣で行われるものと、<sup>②</sup> b 宣政殿南班謝に分割できる。<sup>⑩</sup>『唐會要』卷二五、輟朝雜錄に、<sup>⑪</sup>

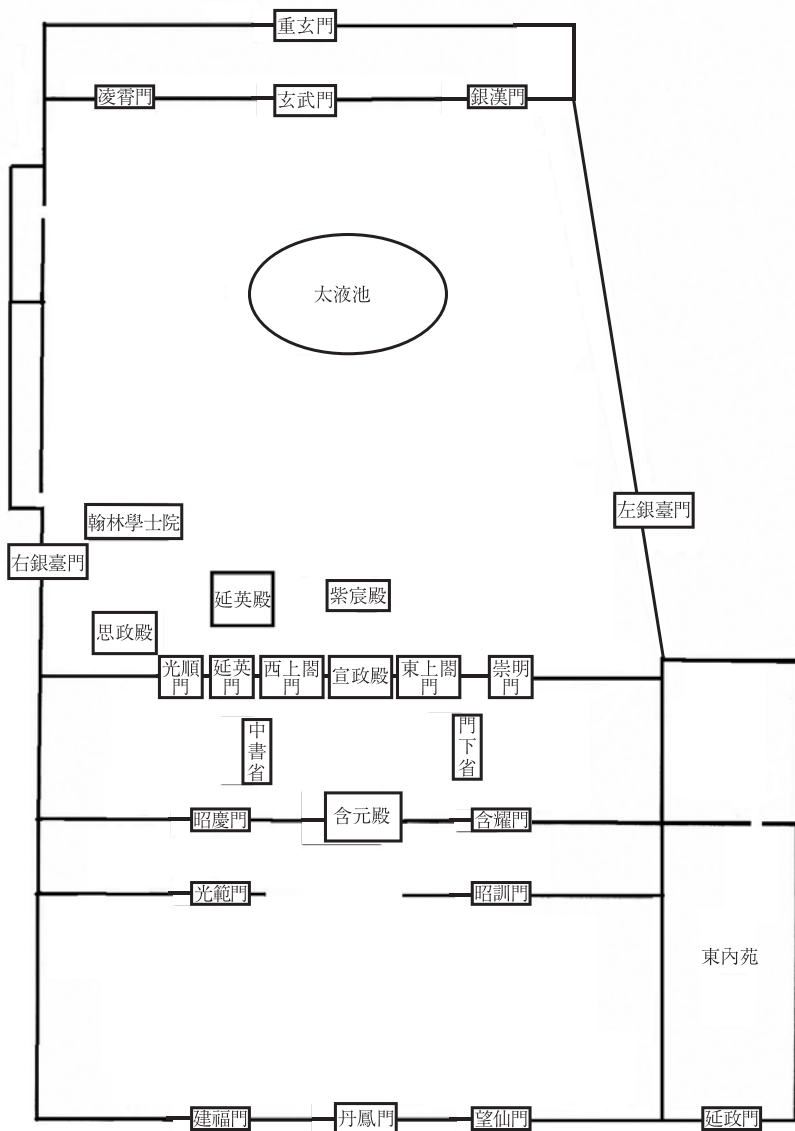
元和元年（八〇八）三月、御史中丞武元衡奏す。

② a 中書門下、御史臺五品以上の官、尚書省四品以上の官、諸司正三品以上の官、及び從三品職事官、東都留守、轉運、鹽鐵、節度、觀察使、團練、防禦、招討、經略等使、河南尹、同、華州刺史、諸衛將軍三品以上の官、除授ならば、皆入閣して謝せんことを。

② b 其餘の官、宣政南班にて拜し訖れば便ち退くを許されんことをと。  
これに従う。

とあり、aにおいては中央・地方の要官が拜謝し、bはその他の官なので、aがbに優越する儀禮であることは間違いない。朝儀の場である入閣（紫宸殿・宣政殿であるが、大明宮中軸線上の正殿のうち、前者が内朝、後者が中朝であった（圖1））。

宣政殿は一般に正衙と呼ばれ、朔望朝參や赦書の發布・將相の任免が宣せられる莊重な御殿であったから、a v bの序列は一見矛盾するのように見える。だが、紫宸殿は實際に皇帝が臨御する御殿であり、宣政殿は普段皇帝が出御しないと想定すると、この問題は解決する。<sup>⑫</sup>つまり、百官は毎日、宣政殿前に序班し、皇帝が出御しない旨を宣せられると退朝



史念海氏編『西安歷史地圖集』（西安地圖出版社，1996年）  
及び妹尾達彦氏『長安の都市計劃』（講談社，2001年）所掲圖に基づく

圖1 唐大明宮概念圖

し（假にこれを「宣不坐」の儀と稱する）、出御する日（唐代後半期は一般に奇數日）は、宣政殿兩翼の東西上閣門入つて紫宸殿で謁見したので、これを「入閣」といった。そこで、唐代の朝儀の序列を示すと次のようになる。このうちBは前半期のみ、Cの奇數日限定の實施は唐代後半期の様態で、必ずしも同時期に行われたものではないが、殿宇の機能分擔と唐人が持つ等差の理念を示すために敢えて表示した。

A元旦・冬至大朝會（含元殿）—B朔望朝會（宣政殿…ただし唐代後半期は舉行せず）—C奇數日入閣（紫宸殿）—D宣不坐退朝（宣政殿）

儀禮の莊重さで等差をつけると、 $A \vee B \vee C \vee D$ となり、頻度で序列すると逆に $A \wedge B \wedge C \wedge D$ となる。Dの宣政殿前立班であるが、決して虚禮というわけではなく、前述のように次要の新任官の拜謝と敕書の發布・將相の任免が宣せられる場であつたので、儀禮上それなりの意義があつた。<sup>13)</sup>

次に五代の朝儀について、後唐期に整備された朝儀の序列は次のようになる。併せて後唐洛陽宮の概念圖と、極めて簡略で遺憾であるが、五代開封宮城の概念圖を掲載する（圖2・3）。<sup>14)</sup>

A元旦・冬至・五月一日大朝會—B朔望入閣—C五日に一度起居—D常朝

朝儀の場については、五代諸王朝が洛陽・開封兩地を都としていたので一概に言えないが、後唐朝を例にとると、洛陽ではA文明殿・明堂殿（後唐同光二年に朝元殿を改稱）、B文明殿、C中興殿、開封では、A崇元殿、B崇元殿、C玄德殿となる。<sup>15)</sup> 莊重さ・開催頻度の等差は前記大唐と同じである。Dの常朝は、大唐の所謂「宣不坐」とほぼ同じであり、「常朝」といかにも朝儀らしい名稱が定着した。實際の皇帝への謁見（C）が大唐の二日に一度から五日に一度へ減つたものの、A五月一日大朝會とB朔望朝會を復興したことにより、朝儀の密度は一概に大唐に劣るものではなく、宋制へと繼承されることとなつた。<sup>17)</sup>

唐代後半期の長安大明宮を中心とする宮城構造との大きな違いは、正殿の軸線が東西に二本竝んだことである。洛陽で

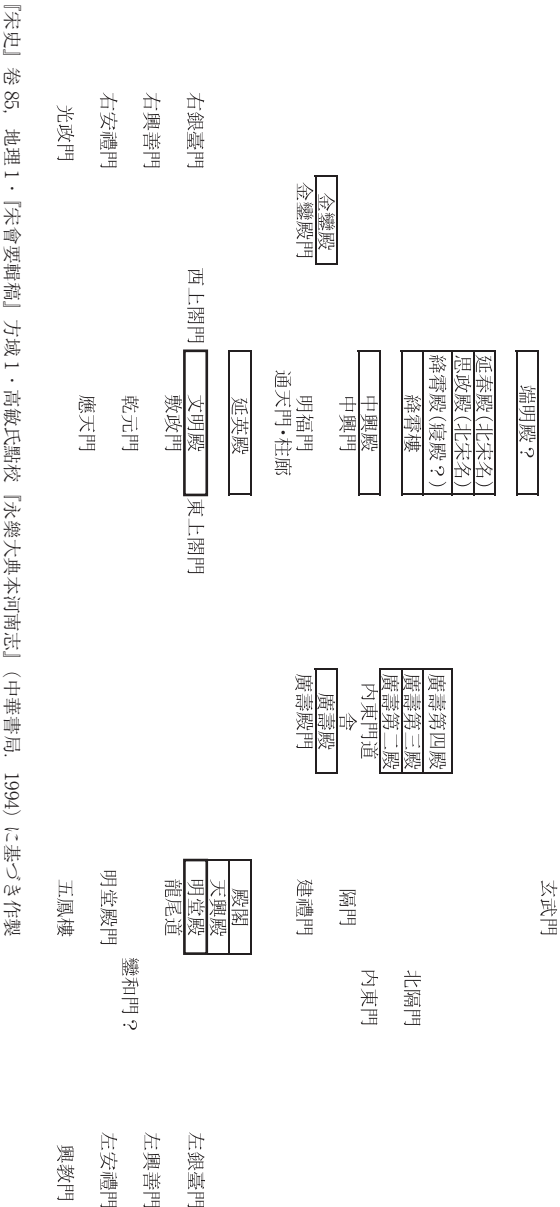


圖 2 後唐洛陽宮城概念圖

萬歲殿(寢殿?)

萬歲門

金祥殿(內殿)

金祥門

崇元殿(正殿)

崇元門

玄德殿(東殿)

玄德門

『冊府元龜』卷 196, 閏位部, 建都, 後梁開平元年(907)四月條に基づく

圖 3 開封主要殿宇配置圖

は明堂殿と文明殿が竝立し、開封では崇元殿と玄德殿が竝ぶ形である。唐の大明宮が中軸線上に三朝正殿が南北に位置して、左右對稱構造であつたのと對照的である。これは、唐末の長安破壊とともに朝廷の據點が洛陽に移つたことに由來する。もともと洛陽宮は則天武后のころから、中軸線西側の殿宇が頻用される傾向があつた。則天武后の死去後、朝廷は長安に復歸し、唐代後半期に大明宮が皇帝の居所として定着すると、左右對稱構造が再び宮城の基本構造となる。その後、朱全忠の洛陽移駐をきっかけに、則天武后時代の構造が復活され確定したのである。そしてこの二軸構造は北宋開封宮城にも受け繼がれる<sup>(18)</sup>。次章以降では五代の謝官儀禮について、その制度的概略を述べたい。

## 第二章 五代の任官謝恩儀禮

北宋では、新任官が宮城殿宇で謝官する朝辭の他に、知州など地方長官が任期満了後京師に歸つて皇帝に挨拶する歸闕朝見の制度があり、朝見・朝辭と概括されていた<sup>(19)</sup>。唐代において、「中謝」と稱される「朝辭」の制度はある程度解明できるものの、管見では唐代の「朝見」の方は記録に乏しい。五代に入ると、この歸闕朝見に相當するものが記録に表れるが、唐制との繋がりについて未だ確證を得ていない<sup>(20)</sup>。歸闕朝見に對する考察は別稿に期し、本稿では唐制と繼承關係の明白な朝辭(正衙謝・中謝)について扱う。表1は、五代の朝儀における新任官の謝恩儀禮を中心に、該當する官職を明瞭に示した史料を抽出し、それがどのような場で如何なる様態で行われたかの規定と、その若干の事例を時系列に並べたものである。

一見して了解されるように壓倒的に後唐の明宗と末帝の史料が多い。この時期が朝廷の儀制の顯著な整備期であること



表1 謝恩儀禮における官職と場

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	王朝	年代	西暦	官職	謝官の場・様態	出典	備考
									後唐	王朝						
	長興元年以降？	天成4年1月17日	天成3年11月11日	天成元年12月11日	天成元年12月3日	天成元年8月	天成元年8月		天成元年7月20日				兩使判官・令録の在京で除授された者	内殿謝恩	舊史36、唐書20、明宗紀2	
930		929	928	926	926	926	926	926					判司・主簿	朝對を許さず	冊632、銓選部、條制4、冊476、臺省部、奏議7、清泰二年の條引天成元年八月敕	
支使・推・巡・令・録	文武4品以下・諸道行軍司馬・節度副使・兩使判官・書記・	文武3品以上・御史中丞・左右丞・諸行侍郎・諫議・給事中・中書舍人・諸道節度・觀察・防禦・團練使・刺史・兩縣令	起居・補闕・拾遺・御史・郎中・員外郎・少卿・監・國子司業以下凡そ升朝官	諸道節度使・觀察・防禦・經略・團練使・諸州刺史	常朝辭謝官	州縣令・録	新除官・使者						正衙辭謝の後、内殿辭謝する	正衙辭謝	冊632、銓選部、條制4、冊476、臺省部、奏議7、清泰二年の條引天成元年八月敕	
のみのみ	舊例（大唐の制？）、中謝せず、正衙朝謝のみ	延英殿中謝・通喚	正衙辭謝から中謝へ	廊參・正衙謝見辭	南班横行、百官と齊拜（文明殿？）											
	五會6、開延英儀	五會6、輟朝雜錄	五會6、輟朝雜錄	五會17、御史臺	冊517、憲官部、振舉2・五會6、輟朝雜錄											
	本文で言及するが大唐の故事の可能性が強い			後梁以來廢れていた唐朝舊制を復活												

表1 謝恩儀禮における官職と場  
続き

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	王朝	年代	西暦	官職	謝官の場・様態	出典	備考
							清泰3年3月11日	清泰2年7月	清泰元年7月	長興4年1月13日	長興3年11月3日							
936								935	934	933	932							
差補	諸道商稅鹽麴諸色務官の在京	將の在京受任	諸道都押牙・馬歩都虞候・鎮將の進奉使	諸道節度使が差する判官・軍將の在京受任	上記以下の昇朝官	文官5品以上・武官4品以上の朝官	諸道書記以下	諸道兩使判官	諸州が差する判官・軍將	御史中丞盧損、令・錄の中謝をやめ、正衙辭謝のみにすることを建議するも却下される	太常卿李鏐	中書侍郎兼刑部尚書平章事劉昫	許州節度使孟鵠					
謝・辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	門辭	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除	中謝無し・膀子を進め謝辭免除
冊108、帝王部、朝會2・五會6、輟朝雜錄								冊476、臺省部、奏議7、	新史57、雜傳、李鏐、	舊史89、晉書15、劉昫、年月日は舊史44、明宗紀	舊史69、唐書45、孟鵠、年月日は舊史43、明宗紀9							
								月は冊633、銓選部、條制5による	年月は舊史46、末帝紀上を參照									

表1 謝恩儀禮における官職と場 続き

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	王朝	年代	西暦	官職	謝官の場・様態	出典	備考
		後周	後漢				後晉											
顯德5年閏7月	廣順3年10月12日	廣順3年3月	高祖朝？	開運2年8月	開運元年8月3日	天福5年1月26日	天福2年11月											
958	953	953	947?	945	944	940	937											
吏部流内銓擔當の官職	受官人	節度使・防禦團練使・刺史・行軍副使等	右領軍大將軍	尙書右僕射	内外臣僚	宰臣・使相	内廷諸司使の正官を受けた場合	諸道の進奏官	文武官の弔祭使及び告廟祠祭	新除令・錄	在京商稅鹽麴、兩軍巡使							
衙謝對駁	省・御史臺が檢舉	衙謝に來ない↓門下ない↓勵行させる	入謝	正衙朝謝	正衙辭謝の際、部内卑官とは同班辭謝せず	門内で百官とともに拜謝	正衙謝、その後は常朝せず	謁見後の請假得替、膀子を進め門辭無し	正衙辭見、中謝無し	中謝、次日の門辭無し、誡勵を宣す	中謝を許す							
五會21、選限	66、帝王部、發號令5	五會6、輟朝雜錄・冊	五會6、輟朝雜錄	新史30、漢臣傳18、聶文進	班序	冊108、帝王部、朝會2	冊108、帝王部、朝會2・五會6、輟朝雜錄・冊594、掌禮部、奏議22	五會5、朔望朝參										
	同あり	五會・冊、字句に異				諸書、字句に異同あり。冊594、5月に繋ぐが冊108に従う												

を物語っている。ちなみに、五代最初の王朝後梁の朝儀であるが、『冊府元龜』卷一九一、閏位部、立法制に、末帝龍德元年（九二一）春正月癸巳。詔す。諸道入奏判官、宜しく御史臺をして點檢し、各の正衙従り退いて後、便ち中書門下において、公參辭謝せしむべし。如し違越有らば、名銜を具して聞奏せよ。

とあり、諸道入奏判官が正衙を退いた後、中書門下で公參辭謝することを規定している。ここである正衙に皇帝が臨御して實際に見えていたか不明である。後梁末の朝會制度は不明瞭な點が多いが、筆者の考察では、皇帝が洛陽に駐在していたころの朝儀の序列は、

正至朝賀（朝元殿・文明殿）―朔望入閣（文明殿）―常朝（金鑾・崇勳殿）

となっていた。<sup>21</sup> 朝元殿は前掲圖1の後唐の明堂殿、同様に崇勳殿は中興殿にあたる。金鑾・崇勳殿には皇帝が臨御していたようなので、朝儀の場で實際に皇帝に見えていた可能性がある。

續く後唐は山西沙陀系異民族軍閥にして大唐の後繼者をもって任じたという複雑な性格の政權であるが、後梁・河北藩鎮を制壓し、本格的に中原支配を固めた王朝である。その覇者莊宗の治世は短いが、『五代會要』卷六、常朝に、

後唐同光元年（九二三）十二月、中書門下奏す。毎日の常朝、百官皆拜するに、獨り兩省官拜せず。本朝の故事に准じるに、朝退き廊下にて食を賜る。これを廊餐と謂う。百官遂に謝食の拜有り。唯だ兩省官、本省に廚有りて、廊餐に赴かず。故に拜せず。伏して僖宗蜀に幸して迴るより、多事の後を以て、遂に廊餐を廢す。百官の拜儀、今に至るまで未だ改めず、將に五十載ならんとす。禮恐らくは停め難し。唯だ兩省官獨り尙お拜せず。豈に終日朝に趨くに、曾て一拜もせざる可けんや。獨り班列において異同する所有り。言官の若きは是れ近臣なり。禮に於いて尤も宜しく肅謹なるべし。今起り後、逐日の常朝、不坐を宣すれば、職事官押班して拜せざるを除くの外、其の兩省官、東西班と並びに齊拜せんことをと。これに従う。

とあり、文末に言うように毎日常朝していたものの、「宣不坐」が常態化していた。一方、實際に百官が皇帝に見えるの

は、月朔の入閣の儀のみであった。<sup>(23)</sup>『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二に、

〔同光二年（九二四年）春正月〕是の月庚申、四方館奏す。常朝の諸職員、多く參雜有り。今後、隨駕將校・外方進奉專使・文武兩班三品以上の官、内殿において對見すべきを除き、其餘は並びに正衙に詣り、以て常禮を申べんことをと。これに従う。

とあつて、文武三品以上の官と隨駕將校・藩鎮の進奉使は内殿で皇帝に見え、その他の官は常禮を行へとある。<sup>(24)</sup>前提に「常朝の諸職員、多く參雜あり」とあるので、「常禮」とは「常朝」であろう。そしてそれは正衙で舉行された。正衙とはおそらく文明殿であり、内殿は次の明宗朝の制度から類推するに中興殿であろう。<sup>(25)</sup>ここで言う正衙の常禮（常朝）であるが、實際に皇帝が臨御する可能性が皆無とは言えないが、第一章で述べた大唐元和元年の制を念頭に置くと、やはり皇帝が出御しないと想定した方が妥當であろう。そもそも、文武の要官が参加しない常朝に、皇帝が出御するのは不自然である。つまり、内殿＝皇帝臨御、正衙＝宣不坐の等差が存在したのである。また、高級官人と親衛軍將校等は内殿で皇帝に謁見したが、その参加者が極めて限定されているので、大唐の紫宸殿入閣のような朝儀ではなく、第一章で述べた便殿延英殿のような内密な會見の可能性がある。前述の如く莊宗朝の朝儀は、月一度の入閣以外は百官が皇帝に直接拜謁することなく、それ以外は内殿における官人との個別的對面で處理されたと推定される。

莊宗朝の不活潑な朝儀を改めるため、明宗が即位すると朝儀が大々的に振興された。五日に一度の内殿起居創始（天成元年五月二日）<sup>(26)</sup>・入閣に望日を加える（同年五月三十日）<sup>(27)</sup>・冬至の朝賀を元日に準じる（天成三年十月二日）<sup>(28)</sup>・五月一日の大朝會舉行（同年同日）<sup>(28)</sup>などが實施され、第一章で述べた、

A 元旦・冬至（文明殿・明堂殿）・五月一日大朝會（文明殿）—B 朔望入閣（文明殿）—C 五日に一度起居（中興殿）—D 常朝（文明殿）

の序列が形成されたのである。<sup>(29)</sup>

表1を見ると、謝恩儀禮は正衙辭謝と中謝に分かれる。表1-8によれば、正衙辭謝から中謝へ變更された官があり、正衙辭謝官と中謝官が別個の範疇であることが伺えるが、それが完全に分離していたか、それとも重複していたかが問題である。時代が降る後晉の事例であるが、表1-28の『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二に、

〔天福五年正月〕壬辰、馮道奏して曰く、宰臣の朝見辭謝、朝堂、横街の南に在り。餘官に至るに逮び、則ち悉く崇元門内において。夫れ表著の列、豈にこれを踰ゆべけんや。故に古先明王、必ず其の位服を正す。此れ實に事偶爾に因り、習いて以て常と爲す。〔中略〕禮僭にして序失う。其れこれを正さ使めんことをと。帝深く其の言を然りとし、是において詔を下して曰く、官爵の班、即ち高下を分つ。見謝の位、豈に異同有らんや。宜しく通規を立て、以て定制と爲すべし。今後宰臣・使相の朝見辭謝、並びに崇元門内において、諸官と行を重ね位を異にし、一時列拜せよ。假開くの横行なれば、即ち舊例に従え。

とあり、宰相・使相は、その他百官と同じ崇元門内で朝見辭謝させたところ。また、表1-29の同書に、

〔開運元年〕八月癸卯、倉部郎中知制誥、陶穀奏す。内外の臣寮、正衙辭謝するに、内なれば則ち諸司の小吏、宰相と差肩し、外なれば則ち屬郡の末寮、元戎と共に接武す。欲し望むらくは宰臣・使相、舊に依つて押班し、其の郡牧・藩侯・臺省・少監長吏等、部内の本司の卑冗官員をして同班して辭謝せしむるを得ざらんしめんことをと。敕す、其の奏に従え。

とあって、恐らく前掲天福五年の馮道の上奏以來、正衙辭謝において宰相・節度使が諸司の卑官と同班して辭謝していたのを改めたのであろう。この記事は、「押班」即ち百官の序班を管理する宰相を除く高級官人が、この時に至つて正衙辭謝を免除されたとも解釋できるが、表1-32には、後述するように節度使以下の地方官の正衙辭謝を勵行する記事があるので、引用文にあるように部内で長吏と卑官が同班しないように調整したものであろう。いずれにせよ、正衙辭謝と中謝は兩立するものであり、正衙辭謝が百官齊一して行う儀禮であり、一部の要官がそれに加えて中謝するという構造である

う。

ここでもう一度確認すると、ここである正衙辭謝に皇帝が親臨すると二度手間であり、そもそも後唐明宗が、五日に一度百官が内殿で皇帝に謁見する制度を創始した意味がない。やはり正衙とは常朝であり、それは皇帝が出御しない儀禮であらう。<sup>(33)</sup>

次に五日起居や入閣における謝官の扱いである。五日起居は實質的に大唐の紫宸殿入閣に代わる百官謁見儀禮であり、その場所は内殿中興殿である。しかし、大唐の様にその場で謝官したかという点、後述する様に一概にそうとも言えない。一方、入閣は、大唐の制と變わり前殿文明殿で行う莊重な儀禮となった。少し長くなるが、表1-5の記事を見てみよう(『冊府元龜』卷五一七、憲官部、振擧とはは同文で、やや詳細な『五代會要』卷六、輟朝雜錄により、記號をつけるなど整理した)。

其の年(天成元年)十二月三日、御史臺奏す。

毎日常朝及び五日起居を論ずる爲の事件後の如し。

一、

① 常朝の辭謝官、合に南班に在り、閣門朝參を放つを宣ずるを候ち、百官と同一に拜すべし。

② 若し入閣に遇わば、敷政門外にて序班す。百官拜せずと雖も、亦た傳宣喚仗に因り、南班此を以て節奏し、便ち拜儀を展ぶ。

今伏して見るに、

③ 内殿起居の日に遇う毎に、先ず常殿の前において序班し、百官設拜せずと雖も、宰臣到るを祇候し、便ち次第に依つて閣門に入り祇候して起居す。固とより宣命を傳うるに便ならず。<sup>(35)</sup>若し南班辭謝有らば、稍や宜に非ざるに似たり。

a、伏して請う、今より後、其の日辭謝を許さず、皆次日にて、常朝班有るを候ち、即ち辭謝するを得しむ。

- b. 若し急切公事に遇わば、即ち請う、舊例に准じ、隔門辭謝し、或いは祇候において宣放せしむ。
- c. 其の文武兩班、更に文明殿前に序立せず、祇だ中興殿門外に序立し、宰臣到るを祇候し、便ち次第に依つて入りて起居せしむ。〈中略〉

奉敕、

〔御史中丞〕<sup>(36)</sup> 盧文紀憲綱を領してより、頗る振舉を思ふ。條奏を備觀するに、皆通規に叶う。

- d. 〔御史大夫〕<sup>(37)</sup> 李琪内殿起居を以て、辭謝を廢せずんば、竝びに留滯を恐る。乃ち是れ權宜なり。

- e. 盧文紀正衙序班を以て、故事を隳るを恐れ、次日を候たんことを請う。

亦た允して依るべし。

- ① 常朝では、辭謝官は閤門が放參を宣する（いわゆる宣不坐）と、百官と共に拜謝する。

- ② 入閣では、文明殿前の敷政門外に序班し、「喚仗」が宣されて百官が入門する際に拜謝する。

- ③ 五日起居の日は、常殿（文明殿）前に序班し、百官は拜禮を行わず、宰相が到着すると文明殿脇の東西上閤門より入り、皇帝に謁見するのであるが、この際、皇帝の命を宣する契機が無い。さらに、宣が無い状態で南班の辭謝官が拜謝するのは不適當であると思われる。

- a. そこで、五日の起居の日は辭謝を許さず、常朝が行われる翌日待つ。

- b. もし緊急の公務があれば、「舊例に准じ隔門辭謝」するか、「宣放」すなわち皇帝の謝官免除の許可を待つ。<sup>(38)</sup>

- c. 今後、（五日起居の日は）百官は文明殿前に序班せず、起居の行われる中興殿の門外に立ち、宰相が来ればそのまま、序列に従い殿に入る。

- d 及び e において、皇帝は、辭謝官が五日起居日に辭謝すると朝儀の進行が妨げられ、また五日起居の文明殿序班は故事ではないので、常朝の日を待つという御史臺首腦部の奏議を許可した。



つまり、五日起居の日は通常の南班辭謝を行わず、常朝で實施する日を待ち、入閣の日は敷政門外で拜謝する、とされたのである。いずれにせよ、ここで儀注を論議されている辭謝官は、いわゆる正衙辭謝官と同じで、拜謝する時に皇帝が面前に居ない遙拜が原則だと分かる。もし彼らが直接皇帝に拜謝すると、内殿中謝する要官との序列が崩れるからである。即ち、皇帝に直接對面せずに辭謝する場及び官員が、儀禮の等差を維持する上で必要だったのである。こうした辭謝官の存在が、實際に皇帝に謁見することのない「常朝」という一見不思議な儀禮が維持され續けた理由の一端である。

また、常朝・入閣の辭謝官の拜謝のタイミングであるが、前者は「宣放朝參」、後者は「傳宣喚仗」であり、どちらも皇帝の宣に基づいて行っている。五日起居の場合、こうした皇帝の指示であるところの「宣」が無いのに拜謝するのは不都合と判斷された譯で、皇帝不在の儀禮であっても、傳達される皇帝の命が拜謝に必要であったことが判明する。これは、生身の皇帝の身體に代わって、口頭で宣布されるお言葉が朝參儀禮の核心となったことを意味する。

實際のところ、唐代初期の皇帝である太宗・高宗などは努めて毎日朝參の官僚の前に姿を現し聽政していたが、彼ら兩人でさえ治世を重ねるごとにそうした勤政の態度を維持することは困難になっていった。<sup>(39)</sup> 唐代後半期、皇帝の身邊に内諸司使の制度が整備され、さらに次章で述べる便殿延英殿を中心に、宰相以下少數官人と皇帝の間で内密に行われる御前會議が效率的に運用されると、常參の場での皇帝―百官の討論は無意味になってゆく。しかし、日常的に百官の皇帝に對する服従を確認する常參そのものは閑却でなかった。

また、入閣では敷政門外で拜謝し、五日起居では拜謝を廢止したのは、大唐の紫宸殿入閣で辭謝が行われていたのと對照的である。紫宸殿で舉行される入閣は常朝の一種でもあり、また實際に皇帝の面前で拜謝するからである。五代は内殿中謝以外の辭謝官（正衙での辭謝官）を、皇帝の面前から排除した所に特徴がある。これは唐代の宣政殿南班謝を正衙（唐代ではこれも入閣と同じく常朝の範疇に入る）とし繼承した結果であろう。唐代の紫宸殿入閣は、皇帝に拜謁する常參官らの儀禮であるとともに、辭謝官の儀禮、及び宰相その他の御前會議（聽政）を含む多様な機能を有した行事であり、儀

禮と聽政が混淆したものであった。それに對して五代の制度は、形式的な拜謝である常朝と、皇帝親臨の儀禮及び聽政の分離が決定的となった。皇帝が直接中謝官に對面するのは、いふなれば聽政の一種であり、五代では形式的儀禮と皇帝の聽政との分離が進行したのである。大唐の制の繼承を志向しながら、諸事多難な五代の事情に應じてアレンジした結果であらうが、前述のように唐代後半期から兆し始めた、延英殿聽政中心の政策運営がより進展したとも言える。

### 第三章 謝官の官職

前章まで新任謝恩儀禮に、正衙謝と内殿中謝の序列があることを述べたが、これと諸官職がどう關聯していたのが問題である。表1-15-26の後唐末帝清泰三年三月十一日の奏議では、諸官職の謝恩の序列が中謝の有無を中心に述べられている。<sup>⑩</sup>この奏議の裁可の結果と、これに、言及されていないそれ以前の制を加えて整理すると以下ようになる（ただし、表1-9・10の『五代會要』卷六、開延英儀の制度は、別に考察する）。

#### 中謝官

文官五品以上、武官四品以上の朝官、及びそれ以下の官品の昇朝官・節度使（觀察・防禦・團練使・諸州刺史含む）<sup>⑪</sup>・諸道兩使判官・在京商稅鹽麴諸色務官・兩軍巡使・州府錄事參軍・縣令

#### 正衙謝のみ

諸道書記以下・文武官の弔祭使及び告廟祠祭<sup>⑫</sup>

ここで、中謝する「昇朝官」には説明が必要である。表1-7では、文官三品以上・武官二品以上とあるが、これは通喚の範圍で、文・武官の中謝が三品・二品以上とは斷定できない。また、表1-15-26の清泰三年三月の制は、『五代會要』卷六、輟朝雜錄にも記載され、それには、

應<sup>⑬</sup>る文武朝官の除授さるるに、文五品・武四品已上、竝びに中謝す。已下、例として對謝無し。天成四年正月の敕

に、凡そ升朝官の新授、並びに中謝するを以て、此の例に准ぜんと欲す。

とあって、當時文官五品・武官四品以上が中謝し、それ以下の官品は中謝していなかったことを伝える。そこで、前掲清泰三年三月の奏議では、天成四年（九二九）正月の「凡そ升朝官が中謝する」旨の敕に依據して、文官五品・武官四品より下位の升朝官も中謝することとしたのである。その明宗天成四年正月の敕とは表1-8であり、

中書門下奏す。往例に准ずるに、起居（從6上）、補闕（從7上）、拾遺（從8上）・御史（侍御史：從6上・殿中侍御史：從7上・監察御史：正8上）、郎中（從5上）・員外郎（從6上）、少卿（正4上・從4上）、監（監は3品官なので、少監だとすると從4上）、國子司業（從4下）已下、新命を加うる毎に、祇だ正衙において謝する後、便ち常朝せしむ。竊に見るに邊遠令、錄すら、尙尙自ら對敷す。班行臣僚、並びに宜しく中謝すべし。今後凡そ升朝官、望むらくは並びに中謝せしめんことをと。これに従う。<sup>(43)</sup>

とあり、中書省・門下省・尙書省・御史臺・祕書省・殿中省・九寺・國子監の四品以下八品にいたるまでの主要官を中謝の範囲に加えた。文官五品・武官四品より下層全般の官僚を指すのではなく、一部の要官である。これらを「升朝官」と一括しているが、それは概ね大唐の常參官に一致する。<sup>(44)</sup>つまり、六品以下であっても三省・御史臺の要官は升朝官とされ、これを中謝の範囲にしたのである。恐らく天成四年の制はその後斷絶していたのが、清泰三年に改めて申明されたものと考ええる。

大唐の中謝は便殿延英殿で行われる直接對話の場で、文宗朝の改革で紫宸殿入閣でも通喚して、中謝の實質を持たせるようになったが、中謝官の範囲に關する明瞭な規定は管見の限りでは記載が無い。<sup>(45)</sup>五代の制度から唐代を類推すると循環論法に陥る恐れがあるが、後唐がかなり大唐の制を意識して儀注を作ったのは事實であり、前述のように「升朝官」とは大唐の常參官に相當するものと考えられる。

しかし、大唐に無くて後唐に加えられた中謝の官職がある。それが「令・錄」即ち州府錄事參軍・縣令である。<sup>(46)</sup>表1-

4にあるように、

〔天成元年〕八月、勅す。中書先に條奏するに、州縣の令、録、正衙の後、合に内殿に赴き謝辭すべき者は、如し令、録是れ除授なる者、宜しく給事中をして引對せしめ、如し是れ旨授なれば、舊例に准じ、三銓尙書侍郎に委ね、各自引對せしむ。仍って須く前一日、閣門にて進狀せしむべしと。勅す、朕方めて區宇を平ぐるを以て、念いて蒸黎に切なり。頃る災歎の餘に當たり、未だ瘡痍の苦を絶たず。邦本を緬惟するに、實に官常に繋かる。苟も未だ雍熙に致さざれば、則ち宵旰に寧んずる莫し。必ず良吏に委ね、付するに親人を以てするに在り。儻し縦に因循すれば轉た勞擾を成さん。先朝、選門興訟を以て、剝放極めて多し。近年以來、銓注幾ばくも無く、遂に諸道州縣、悉く是れ攝官なるを致す。既に考課の規無く、豈に廉勤の節を守らんや。況んや多く薦託に因り、顔情に苟徇し、替罷常ならず。送迎弊と爲り、殘民害物、日を以て時に繋く。言念深き所、焦勞何ぞ已まん。宜しく三京及び諸道州府をして、見任攝官に據り、如し未だ〔正官有らずんば、差攝の月日を具し録名申奏せしめよ〕。如し已後、或いは公事を爲し、及び月限已に滿ち、替換を行わんことを要むれば、即ち須く因繇并びに選差せし攝官の自來の歷任姓名を具し聞奏〔替兌〕し、故無く〔頻りに替換有るを得ること無からしめよ〕。如し内外臣僚、輒りに薦託を行う有らば、竝びに應副を得ず。儻し違越を聞かば、當に憲章を擧ぐべしと。

とあり、天成元年（九二六）八月以前の段階で、すでに令・録の正衙謝と中謝が行われていたようである。その令・録中謝であるが、除授された者は給事中が引對、旨授された者は三銓尙書侍郎が引對するとある。恐らく前者が宰相府の擬官、後者が吏部銓選による任官であろう。<sup>(48)</sup> 録事參軍は大唐の官品で最上位の京兆・太原・河南各府の司錄參軍、大都督府録事參軍で正七品上、中都督府で正七品下、最低ランクの下州録事參軍で從八品上、のち肅宗乾元元年（七五八）に一品昇されたとされ、地方官府で重視された官である。唐末から五代にかけて州刺史が軍人で占められるようになると、州院系統の官職の元締めとして、州廳のみならず屬縣にも影響力を及ぼし、縣令と竝んで「令・録」として財政分野を中心に地方

統治の要とされたものである。<sup>④9</sup> もちろん、五代に藩鎮軍職系統の官が権限を擴張して州院の職掌を侵奪したのは事實であるが、<sup>⑤0</sup> そうであればこそ、中央政府が肩入れしなければならぬ官職であった。任官者に吏部銓選の旨授の他に「除授官」が存在していたのは、これらの官職を重視したためであろう。引用文後半の、州縣官に攝官が蔓延し、地方政治の荒廢を嘆く記事は、令・錄の人事重視と表裏を爲すものである。この後、先に引用した天成四年（九二九）正月十七日の記事にあるように、中央官を差し置いて令・錄が中謝していたことが云々され、表1-14にあるように、卑官である令・錄の中謝をやめる建言がなされたが、却下された。表1-24にあるように清泰三年の内外官吏對見例においても、令・錄の中謝が規定されている。

ここで、表1-9・10にある史料を検討しなければならない。これは『五代會要』卷六に掲載される「開延英儀」と稱される史料である。やはり長文であるが番號・記號をつけて整理して掲載する。

I. 内中に公事の商量有らば、即ち宣頭を降して閣門に付し、延英を開く。閣門宣を翻して中書に申し、並びに正衙の門に勝す。

II. 如し中書に公事の敷奏有らば、即ち宰臣膀子を入れ、延英を開かんことを奏請す。祇だ是れ宰臣對に赴く。

III. ① a. 閣門使奏す、「宰臣某已下延英に候對す」と。 b. 宣徽使殿上にて「通」と宣す。 c. 次閣門使奏す、「中書門下到る」と。 d. 次宣徽使喚ぶ。 e. 次閣門使傳聲して喚ぶ。 f. 次通事舍人宰臣を引き殿に當たり立班せしむ。 g. 贊して兩拜せしむ。搢笏して舞蹈す。 h. 又三拜、奏す、「聖躬萬福」と。 i. 又兩拜す。 j. 金口宣す、「上り來たれ」と、又兩拜す。 k. 通事舍人引いて上殿せしめ、御座前に至る。 l. 又兩拜し、聖體を問う。 m. 皇帝「安」を宣す。 n. 又兩拜し、三たび「萬歲」と呼ぶ。 o. 各の班を分ち案前に立定す。 p. 兩樞密使、御榻兩面に在りて祇候す。 q. 其餘の臣僚、並びに約して外次に近づく。 r. 奏事訖わり、s. 「茶を賜う」と宣す。 t. 又兩拜し、三たび「萬歲」と呼ぶ。 u. 坐を賜り喫茶す。 v. 對し訖わり、殿を下り兩拜す。 w.

「酒食を賜う」と宣す。x. 舞蹈謝恩し訖る。y. 宣徽使喝す、「好し去れ」と。z. 中書に就いて食を喫す。

## ②

a. 延英畢り、b. 次、兩省官轉對す。c. 閣門使殿に當たり奏す、「某已下轉對す」と。d. 宣徽使殿上にて「通」と宣す。e. 次閣門使奏す、「某已下到る」と。f. 次宣徽使喚ぶ。g. 次閣門使傳聲して喚ぶ。h. 次通事舍人引き殿に當たり立定す。i. 贊して兩拜せしむ。搢笏舞蹈す。j. 又三拜し、「聖躬萬福」と奏す。k. 又兩拜す。l. 殿下にて奏事し訖る。m. 「酒食を賜う」と宣す。n. 又兩拜し、舞蹈謝恩す。o. 閣門使喝す、「好し去れ」と。p. 南班にて殿に揖して出づ。q. 客省において食に就く。

## ③

a. 次對官、御史中丞、三司使、京兆尹並びに各の所司の公事を奏す。b. 次閣門使奏す、「某祇候次對す」と。c. 宣徽使殿上にて「通」と宣す。d. 次閣門使奏す、「某到る」と。e. 次宣徽使喚ぶ、f. 次閣門使傳聲して喚ぶ。g. 次通事舍人引き殿に當たり立定す。h. 贊して兩拜せしむ。i. 搢笏し舞蹈し、三たび「萬歲」と呼ぶ。j. 又三拜し訖わり、「聖躬萬福」と奏す。k. 又兩拜し、所司の公事を奏し訖わる。l. 「酒食を賜う」と宣す。m. 又兩拜し、舞蹈して謝し訖わる。n. 閣門使喝す、「好し去れ」と。h. 南班にて殿に揖して出づ。i. 客省において食に就く。

## ④

a. 合に延英に赴くべき中謝官。

文武兩班三品及び御史中丞、左右丞、諸行侍郎、諫議、給事、中書舍人、並びに諸道節度、觀察、防禦、團練使、刺史、兩縣令、皆入謝し、並びに通喚す。

b. 文武四品已下及び諸道行軍司馬、節度副使、兩使判官、書記、支使、推、巡、令、錄等、舊例、並びに對敷申謝せず。祇だ正衙において朝謝す。

## Ⅲ.

①が宰相の奏對、②が兩省官の轉對、③が次對官以下の諸司官人の奏對、④が中謝官と正衙謝官の類別である。これまでも何度か言及したが、ここであらためて説明すると、延英（殿）とは、もと大唐大明宮の紫宸殿の西にあった脇

殿で(圖1)、紫宸殿が正殿であったのに對し「便殿」とよばれた。肅宗・代宗朝のころから宰相以下少數官人を召對する御前會議の場となり、唐代後半期の政治の中心となった殿宇である。<sup>(51)</sup>五代では、後梁から後唐明宗朝まで洛陽宮に存在したと思われる(圖2)。<sup>(52)</sup>この「開延英儀」は極めて詳細に儀注が記載された魅力的な史料であるが、作製された時期とその内容が何時のものであるかが問題である。

前掲③aに「次對官、御史中丞、三司使、京兆尹」とあり、三司使が獨立した官として記載されているので、作製時期・内容が長興元年(九三〇)八月乙未以降であるのは確かであろう。<sup>(53)</sup>また、後唐末帝の清泰二年(九三五)に宰相盧文紀が、唐の延英の故事を復活するよう進言して却下されているので、明宗朝以後延英殿は顧みられなくなつたと推定される。よつて明宗の長興年間(九三〇～九三三年)から末帝の即位(九三四年)までが有力であろう。<sup>(54)</sup>

儀注の内容であるが、Ⅲ①の宰相奏事の際、p・qに記載されているように樞密使が御榻の兩側に祇候し、その他の臣僚がその場から離れるのは、大唐の制と若干異なる。<sup>(55)</sup>Ⅲ①r・uの宰相が奏事し終わり賜坐喫茶する儀注であるが、唐代では宰相奏事の際に坐を賜るのが通例であり、<sup>(56)</sup>また管見の限りでは茶を賜つた事例は見あたらなかつた。したがつて大唐の制そのままでないことは明らかである。

問題は、Ⅲ④aの延英中謝官とb正衙朝謝官である。まずaであるが、表1・7・8の天成年間の制及び表1・18・19の清泰三年三月十一日の制と一致しない。またbであるが、令・錄が中謝しないのは前述した後唐の制と一致しない。またbに「舊例」とあるが、これを假に吳麗娛氏の見解の通り大唐の制だと假定すると、<sup>(57)</sup>それ以前の儀注は唐制ではないのに對し、この部分で突然唐制を持ち出した意圖がやや不明瞭ではある。恐らくこの「開延英儀」は五代の儀注らしきものに、吳麗娛氏が想定する如く大唐の中謝官の故事を附したものと思われる。すなわちトータルとして五代の制度として確言できない。従つて、當該史料は注意して扱わねばならない。

論旨が紆餘曲折したが、後唐末帝のころになると、正衙辭謝官から抽出された中謝官は内外の重要官職であり、彼らは



正衙辭謝と中謝の二段階の朝儀の場で拜謝の儀禮を行っていたことになる。前者は百官一同に會した儀禮であるが、皇帝が親臨しないものであり、後者が實際に皇帝に見えるものである。しかし、先述の如く昇朝官が皆中謝するようになったので、正衙辭謝固有の意義が低下することになった。五代末の後周朝には、次のような事態が現れる。表1-32に、

周廣順三年（九五三）三月、御史臺奏す。應る節度使・防禦・團練使・刺史・行軍副使等に除授さるるに、近日、正衙辭謝に到らず。多く別に宣旨を奉ずと稱す。敕す、今後此の色の除授、宜しく閣門をして告報せしめ、勅して正衙辭謝せしむべし。如し宣旨して辭謝を放つ有らば、閣門姓名を具して分明し、御史臺・四方館に投ぜよ。

とあり、節度使以下行軍副使に到る地方長官・副使が正衙辭謝を缺席することを責めている。また、表1-33では、

〈廣順三年〉其年十月十二日、敕す。〈今起り後、更に官を受くるに衙謝に赴からざる人有らば〉、宜しく門下省・御史臺をして檢舉し、追勘聞奏せしむ。其の授官の後、程に違い赴任せずんば、竝びに元敕に准じて殿選す。如し選未だ滿ちず、便ち來りて乞官する者、〈本選を〉除くの外、別に降敕を行い施行せよ。

とあつて、御史臺等に檢舉を命じている。前者は「多く別に宣旨を奉ずと稱す」とあるので、皇帝の敕によつて正衙謝官が免除されたと稱して缺席したのであらう。正衙謝官免除が、皇帝が賜る特例と認識されていたことを伺わせる。<sup>(90)</sup> 正衙辭謝忌避の根本的理由として、ある意味當然なことであるが、中謝が皇帝に拜謁する重要な儀禮であるのに對して、正衙辭謝が皇帝不在で行われるところにある。中謝の範圍を擴大して皇帝が新任の要官に面對して直接把握するようになった結果である。

また、廣順三年三月の奏文で列舉されているのは節度使以下の地方官であり、期限内に地方へ赴任する必要がある儀禮を怠つたものと思われる。十月十二日の敕文では、「程に違い赴任」しない者を戒めており、こうした任官者への統制強化が、逆に正衙辭謝を蔑ろにする傾向に繋がつたのではなからうか。廣順三年といえ、この年の二月に專權樞密使王峻が失脚し、それに危機感を抱いたもう一人の權臣王殷が十二月に誅殺されている。後周の太祖が内憂を清算すべく行動を起



こしている時期であり、また、五代も終局を迎え、前代に比べ皇帝権力も強化されつつあった。<sup>61</sup> 後唐期の如く權威誇示のために儀禮の整備勵行に傾注する時世ではなくなった。しかし、その儀禮自體は「明君」明宗の故事としてその後も維持されてゆくのである。<sup>62</sup>

最後に、五代に要官となった樞密使や内諸司使の謝官についての問題がある。前掲表1-15-26の後唐末帝の制では、樞密使・内諸司使は言及されていない。『五代會要』卷五、朔望朝參に、

晉天福二年（九三七）十一月、中書門下奏す。唐貞元二年九月五日の敕に准ずるに、文官の翰林學士及び皇太子諸王侍讀に充つる、武官の禁軍職事に充つるは並びに常朝參せず。其の三館等諸職事官に在りては、並びに朝參し訖わり、各の務むる所に歸するの者とあり。疊朝自り已來、文武内廷に在りて職に充つ、三司を兼判す、或いは職額を帶ぶ、及び六軍判官等、例として常朝に赴かず。先に正敕無し。近敕に准ずるに、文武職事官未だ升朝せざる者、舊制を按ずるに、並びに朔望朝參に赴くと。其の翰林學士、侍讀、三館諸職事官、望むらくは元敕に准じて處分せん。其の諸の内廷に在る諸司使等、正官を受くるの時毎に、來りて正衙に赴き謝する後、常朝に赴かず。大朝會なれば禁廷の位次を離れず。三司職官、常朝を免じ、唯だ大朝會に赴く。其の京師未だ升朝せざる官、祇だ朔望朝參に赴く。諸司の職掌を帶ぶる者、此の例に准ぜず。文官、端明殿、翰林學士、樞密院學士、中書省知制誥を除くの外、兼官兼職有る者、仍て各の本司公事に發遣せられんことをと。これに従う。

とあり、内廷諸司使は正官（すなわち外朝官）を受けると正衙（の常朝）で辭謝し、以後は常朝に参加しないとしている。つまり正衙謝官は外朝官の身分で行うのであり、その謝官の際以外は常朝に参加しないので、内諸司そのものは正衙の朝會儀禮と關係が希薄であることがわかる。だとすると、内諸司に任官した際に正衙謝官する可能性は低い。恐らく大唐時代、内諸司が翰林學士などを除いて、基本的に宦官の官職であったことの名残であろう。

これに對して、中謝であるが、唐代では翰林學士が、延英殿で中謝する外朝百官と區別され、思政殿（前掲圖1）で遷

官中謝していた記録がある。しかし、それは兼任している外朝官が遷轉した際に行うものであった。<sup>(65)</sup> 五代の樞密使の例では、『新五代史』卷二七、唐臣傳一五、朱弘昭傳に、

是の時、明宗已に病み、秦王從榮の禍起るに端有り。唐の諸大臣、皆引去し、以て禍を避けんと欲す。樞密使范延光、趙延壽、日夕更も見え、涕泣して去らんことを求む。明宗怒りて許さず。延壽、其の妻興平公主をして入りて中に言わしむ。延光も亦た孟漢瓊、王淑妃に因りて進説す。故に皆罷むを得たり。弘昭及び馮贇を以て、延壽、延光に代う。弘昭入見して辭して曰く、臣、厮養の才、大任に當たるに足らずと。明宗これを叱して曰く、公等皆吾が目前に在るを欲せざらんか。吾、公等を養うに、安くにか用いんと。弘昭惶恐して乃ち視事す。

とあつて、中謝の場で辭職を願ひ出たことを記している。しかし、『冊府元龜』卷七八、帝王部、委任二では、朱弘昭が山南東道節度使から「檢校太尉同中書門下平章事充樞密使」への遷官の制が降つた時の事としている。五代の樞密使は概ね外朝の官を帶びており宰相との兼官も多く、樞密使單獨の謝官と見なせるか微妙である。しかし、後の北宋では宰相・節度使と竝んで樞密使や宣徽使の謝官が當然の如く規定されている。<sup>(66)</sup> 或いは五代から内諸司單體での中謝が存在した可能性があるが、残念ながら確言はできない。

#### 第四章 中謝の場と實施頻度

正衙辭謝の場は、前述したように洛陽の文明殿、開封の崇元殿であるが、中謝の場がどこであつたかが問題である。<sup>(66)</sup> 『五代會要』卷六「開延英儀」が、前章で考察した如く五代と大唐の制の混淆であるから注意を要するが、洛陽延英殿が一時中謝の場であつたことは推定できる。しかしながら、同殿が後唐末帝朝に廢れていたことは先述した通りである。

『冊府元龜』卷七八二、總錄部、榮遇に、

晉の劉昫、初め後唐に仕え兵部侍郎端明殿學士爲り。長興四年（九三三）、行中書侍郎兼刑部尚書平章事たり。入謝

の日、大祠に遇い、明宗中興殿に御せず。昉、中興殿門に至る。閤門使曰く、舊禮、宰臣謝恩するに、須く正殿において通喚すべし。今日、上、大祠を以て正殿に坐せず。來日を候たんことを請うと。樞密使趙延壽曰く、命相の制下りて已に三日、中謝宜しく後時無かるべしと。即ち奏聞し、昉、遂に端明殿廷に中謝す。昉、端明學士自り拜相するに、本殿に謝す。人士これを榮とす。

とあり、明宗朝において宰相の中謝が中興殿で行われていたことが判明する。しかも閤門使が内殿である中興殿を「正殿」と呼んでいる。恐らく便殿延英殿は早くも明宗朝から使用されなくなり、中興殿が政治の據點となつたのであろう。先述の如く明宗の治世よりさほど隔たつていない末帝期に延英殿が廢れているを見れば、おそらく宰相以外の諸官も、召對の場が延英殿から中興殿に移行したと思われる。また、劉昉の中謝が個別的な召見であつたことも分かる。前章で論じた令・錄のような小官が給事中や尙書・侍郎に引率されたのに對し、宰相クラスの要官はこのような個別的謁見が可能であり、むしろそれが必須だったといえる。

次に中謝官がいつ參上したかであるが、唐代後半期では、第一章で述べた如く視朝は原則奇數日で、例外もあつたが延英殿もこの日に開いた。<sup>(67)</sup>従つて中謝も奇數日に行われた。五代ではどうであつたろうか。前掲『冊府元龜』の劉昉の記事では、明宗が故有つて視朝しない日にも彼は中謝のために參内している。『舊五代史』卷四六、唐書二二、末帝紀上、清泰元年（九三四）十一月の條に、

中書門下奏す。二十六日明宗の忌なり。陛下初めて忌辰に遇う。常歲に同じからず。請う忌辰前後に各の一日、坐朝せざらんことをと。これに従う。御史臺奏す、前任節度使・刺史・行軍副使、毎日便殿において起居すと雖も、五日の起居に遇う毎に、亦た合に綴班すべしと。これに従う。

とあり、前任節度使・刺史・行軍副使が毎日便殿で起居しており、五日起居の日も班列に加わるようにしている。<sup>(68)</sup>また、『五代會要』卷一三、中書門下に、

《清泰》二年（九三五）三月、宰臣張延朗奏す。臣、三司の事を判し、毎日内殿にて祇候す。其の合に前班に綴して押班すべきは、伏して乞うらくは特に免ぜられんことをと。これに従う。

とあり、宰相兼判三司の張延朗が毎日便殿に祇候していたと傳える。特に免じられた前班の押班とは、宰相の職務である常朝押班であろう。また、註（51）で引用した『五代會要』卷六、常朝の天成元年（九二六）五月十九日の敕に、「近年已來、正殿に坐せざるに遇うと雖も、或いは是れ延英にて宰臣に對し、或いは是れ内殿にて機務を親決す」とあり、天成年間初期では、延英殿と内殿（中興殿？）が併用されたことが分かるが、同時に正殿に視朝しない日でも皇帝が禁中で聽政していたことを傳える。ちなみに五日起居が創始されたのは、同年五月二日である。以上、間接的な史料であるが、明宗朝以後、皇帝が毎日禁中で臣下に接見していたことが分かる。そうであれば、中謝は毎日と言わずとも、かなり頻繁に行われていたと推定できる。

こうした状況は、宦官に圍繞され、入閣・開延英が無いと臣僚の前に姿を現さなかった唐代後半期の皇帝とは様相を異にする。莊宗朝に残存した宦官勢力にとどめを刺し、内諸司使を文武臣僚に變えた後唐明宗は、確かに時代を劃した君主であろう。

## おわりに

五代後唐明宗・末帝朝を中心に整備された朝會儀禮は、正衙謝官と中謝という二段階の任官謝恩儀禮を含んでおり、前者はほぼ毎日舉行され、後者もかなりの頻度で舉行されたことが推測される。兩者の比重は皇帝が親臨するか否かで決まり、後者が前者に優越した。中央・地方の要官は兩方に參加しており、形式としてはあながち大唐の制に劣らない。五代の政治情勢は極めて流動的で皇帝權力が脆弱な「混亂期」であることは周知の事實であるが、儀禮の側面では唐制をモデルとしながら、より煩瑣なそれが構築され、次代の北宋の範型をもたらしした。朝會儀禮においては、皇帝の御しない

「常朝の儀」がその典型である。一見虚禮の如き皇帝不在の朝禮は、それを嚴格に實行し、朝廷の秩序と、目前にいないものの嚴として存在する皇帝に對する認識（宣と拜謝がそれを確認する手續）を參加者の身體に馴致させることによって、弱體化した皇帝權力のことさらな儀禮的誇示、つまり權威に繋がる。皇帝親臨の場と、不在の場の兩方の儀禮を必要としたのである。任官謝恩儀禮はそうした「常朝」の構成要素の重要な部分を成していた。

一方の中謝は、どこまで實際的な効果を發揮したか疑問であるが、府州錄事參軍・縣令を組み込むなど地方行政に對する關與を強める企圖を有するものである。また、明宗以下の皇帝は、日常的に禁中で臣僚と接見し難局に對處しようとしていた。こちらの側面も北宋の制の根據となる。大唐に萌芽した儀禮を五代の實情に合わせて改變し、北宋に傳えたのが後唐朝といえよう。

また、こうした正衙謝と中謝の二段構えの儀禮は、皇帝の權威を官人に自らの身體的所作で以て認識させる朝會儀禮と、少人數の大臣で行う實質的政策決定の場である聽政の分離といえる。唐代では太宗の貞觀の治に代表されるように兩者一致するのが本來のあり方とされていた。<sup>72</sup>しかし唐代後半期から朝儀と聽政は分離し始め、五代にその傾向が決定的になる。唐の「宣不坐」から五代の「常朝」への轉換である。これは、五代の混亂期に難局を乗り切るためにもたらされた、いわば權威と權力の分割といえよう。前者は廣範な臣僚が參加する儀禮であり、後者は宰相・内諸司を中心とする少數の高官と皇帝による機動性に富んだ政策決定である。

本稿では、そうした禁中での皇帝と諸官の活動のほんの一部分にしか言及できなかった。五代における禁中での聽政、即ち政策決定が如何なる様態を呈していたかを解明することが今後の課題であり、後日に期する次第である。

## 註

(1) 元日朝會については、渡邊信一郎氏『天空の玉座』（柏書房、一九九六年）参照。常朝についての伝統的な見解については、秦蕙田『五禮通考』卷一百三十三、嘉禮六、朝禮参照。

(2) 拙著『唐王朝の宮城と御前會議——唐代聽政制度の展開』（晃陽書房、二〇〇六年）、拙稿「唐代前半期の常朝——太極宮を中心として——」（『東洋史研究』六五卷二號、二〇〇六年）。筆者と問題意識を共有する近年の研究に、杜文玉氏「論唐大明宮延英殿的功能與地位——以中樞決策及國家政治爲中心」（『山西大學學報』三五卷三期、二〇一二年）、杜文玉・趙水靜兩氏「唐大明宮紫宸殿與內朝朝會制度研究」（『江漢論壇』二〇一三・七）があるが、残念ながら拙著・拙稿を参照して戴けなかつた。

(3) 「唐末五代前半期の朝儀について——入閣・起居・常朝を中心に——」（『立命館東洋史學』三七號、二〇一四年）。なお、李芳瑤氏「論北宋時期的『入閣儀』」（『首都師範大學學報』二〇一五・三）は、前掲註(2)の筆者の所説を採用し、唐から五代を経て北宋に至る朝會儀禮の變化を、「入閣」儀禮（本稿第一章で後述する）に焦點を當てて概論されている。

(4) 藩鎮の權力構造については、周藤吉之氏「五代節度使の支配體制（上・下）」（『史學雜誌』六一卷四・六號、一九五二年）、堀敏一氏「藩鎮親衛軍の權力構造」（『唐末五代

變革期の政治と經濟』、汲古書院、二〇〇二年、初出一九六〇年）日野開三郎氏『日野開三郎東洋史學論集』第二卷「五代史の基調」（三一書房、一九八〇年、うち「五代の廳直軍について」初出一九三九年、「五代鎮將考」初出一九三八年）が古典的な研究である。樞密使など内諸司については、富田孔明氏「五代の樞密使」（『龍谷史壇』九五、一九八九年）、趙雨樂氏「唐宋變革期の軍政制度——官僚機構與等級之編成」（文史哲出版社、一九九四年）、戴顯群氏「唐五代政治中樞研究」（廈門大學出版社、二〇〇一年）、李全德氏「唐宋變革期樞密院研究」（國家圖書館出版社、二〇〇九年）等がある。

(5) 續く宋代の任官謝恩儀禮については、苗書梅氏「朝見與朝辭——宋朝知州與皇帝直接交流的方式初探」（『首都師範大學學報』二〇〇七・五）に、地方長官を中心に考察がされている。

(6) 北宋の朝儀についての概略は、平田茂樹氏「宋代の宮廷政治——「家」の構造を手掛かりとして——」（笠谷和比古氏編『公家と武家Ⅱ「家」の比較文化的考察』思文閣出版、一九九九年）参照。

(7) A『唐禮攷遺——中古書儀研究』（商務印書館、二〇〇二年）。B「晚唐五代中央地方的禮儀交接——以節度刺史的拜官中謝、上事爲中心——」（盧向前氏主編『唐宋變革論』、黃山書社、二〇〇六年）。C『敦煌書儀與禮法』

- (8) 前掲註(7) 吳氏Cは唐制の「常參」が五代になると「起居」と正式に改名されたとされるが(同書四〇五頁)、筆者の理解では、後述するように唐代の常參はその實態を變えながら五代の「常朝」へと繼承されるものと考えている。
- (9) 延英殿と便殿については、前掲註(2) 拙著参照。
- (10) 引用文には、「南班拜」とあるが、後述する『五代會要』卷六、輟朝雜錄、天成元年(九二六)十二月三日の條には、「常朝辭謝官、合在南班」・「若有南班辭謝」とあり、南班における謝官の拜なので、「南班謝」とかりに稱しておく。
- (11) 以下引用文獻中の〈〉は筆者注、( ) は原注。また明版『冊府元龜』の避諱による「嘗」や、「巳」などの癖字は改め、誤字・缺字は周助初等氏『冊府元龜校訂本』(鳳凰出版社、二〇〇六年)によって校訂し〈〉内に附した。
- (12) 前掲註(7) 吳氏Cは、宣政殿謝官の場にも皇帝が臨御すると考えられているようで、入閣が正衙に優越する理由を前者に「撫懷の意」があることに求められている。つまり、前者の方が皇帝と参加者の間が親密故と解釋されているのであろう(四二七頁)。筆者は、本文で述べたように宣政殿謝官の場には、皇帝は出座しなかったと考える。
- (13) 以上の見解は、前掲註(2)の拙著・拙稿及び拙稿「唐代朝參和「宣不坐」之儀」(『黎虎教授古稀紀念——中國古代史論叢』、世界知識出版社、二〇〇六年)に基づく。
- (14) 五代の開封宮城については、不明な點が多い。北宋の宮城についてもっとも詳細な傳喜年氏『山西省繁峙縣嚴山寺南殿金代壁畫中所繪建築的初步分析』(『傳喜年建築史論文集』、文物出版社、一九九八年、初出一九八二年)掲載圖と比較すると、崇元殿が北宋の大慶殿に繼承された他、明確な繼承關係が認められない。五代末から北宋初期にかけて宮城の大幅な改築がなされたものと思われる。また、その際、洛陽の宮殿配置を参照したようである。『宋會要輯稿』方域一之二、及び前掲註(3) 拙稿参照。圖3中の萬歲殿の位置であるが、『舊五代史』卷一二〇、周書一一、
- (15) 甘肅教育出版社、二〇一三年)、『刺史書儀』については、周一良氏「敦煌寫本書儀考(之一)」(北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』、一九八二年)、陳祚龍氏「看了周作〈敦煌寫本書儀考(之一)〉以後」(『敦煌學』卷六、一九八三年)、趙和平氏「後唐時代刺史專用書儀」(周一良・趙和平兩氏『唐五代書儀研究』、中國社會科學出版社、一九九五年)、同氏「敦煌表狀箋啓書儀輯校」(江蘇古籍出版社、一九九七年)参照。本書儀は、<sup>349</sup>・p.384を合冊したもので、唐耕耦氏編『敦煌社會經濟文獻真蹟釋錄』第五輯(書目文獻出版社、一九九〇年)に、「一〇、書儀小冊子」として寫真と録文が掲載されている。また、五代朝儀の概略については、陳戌國氏『中國禮制史——隋唐五代卷——』(湖南教育出版社、一九九八年)、杜文玉氏『五代十國制度研究』第六章(人民出版社、二〇〇六年、初出二〇〇五年)が、唐制の理解について筆者と見解が異なる部分があるが、参考すべき先行研究である。



恭帝紀、建德六年（九五九）十二月甲戌の條に萬歲殿を紫宸殿に改名する旨記されているので、上記傳熹年圖の紫宸殿の位置から類推した。また、東殿玄德殿が五代王朝で重要な役割を果たしているが、『宋會要輯稿』方域一之五に、

集英殿、舊曰玄德、亦曰廣政。開寶二年、改大明。淳化元年正月、改含光。大中祥符八年六月、改會慶。明道元年十月、改元和、尋改今名。每春秋誕聖節、錫宴此殿。熙寧以後、親策進士于此殿。

とあって、北宋の集英殿がその後身の如く記されているものの、傳熹年圖では集英殿は大慶殿の西北の殿宇であり、東殿とする本文圖所掲の『冊府元龜』の記述に合わないもので、概念圖では崇元殿の東に記した。

- (15) 前掲註(3) 拙稿參照。Dの常朝の場について、『冊府元龜』卷五一七、憲官部、振舉二、天成元年（九二六）一月二月丙戌の條に、「御史臺奏、常朝の辭謝官、常朝なれば、則ち南班横行にて百官と齊拜す」とあり、『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二、後晉天福二年（九三七）の條に、

四月丙午、御史臺奏。文武百寮、每五日一度内殿起居。在京城時、百官於朝堂幕次、自文明殿門入、穿文明殿庭、入東上閣門、至天福殿序班。

とあり、洛陽宮城の事例を示している。天福殿とは後唐洛陽の中興殿であり、五日に一度の内殿起居の宮城内移動について、朝堂→文明殿の門（後唐の敷政門？）→文明殿庭→東上閣門→天福殿（後唐の中興殿）とあるので、常朝の

場は、恐らく洛陽では文明殿であろう。前掲註(7) 杜氏論著參照。前掲註(7)の所謂「刺史書儀」には、「正衙謝狀」があり「謹んで正衙に詣り祇候、謝す」とある。また、同書には、「謝狀」「辭膀子」などがありそれらには、「謹んで東上閣門に詣り祇候」とある。東上閣門は文明殿の脇門である（圖2）。開封では文明殿に相當する崇元殿と思われる。なお、常朝以外の後唐の百官序班の場は、入閣では敷政門外に班し、五日起居は從來、文明殿前であったが、後に中興殿前に移動した（前掲『冊府元龜』卷五一七、憲官部、振舉二、天成元年十二月丙戌の條）。

- (16) ここで、朔望の朝會が内殿ではなく前殿（文明殿・崇元殿）で舉行される莊重な儀禮であるにも関わらず、大唐と異なり「入閣」と名附けられたことに注意。この點が歐陽脩などの議論（『新五代史』卷五四、雜傳、李琪傳）を引き起こすことになる。前掲註(2) 拙論及び前掲註(3) 李芳瑤氏論考參照。

- (17) 以上の見解は、前掲註(3) 拙稿參照。

- (18) 傳熹年氏は洛陽宮の二軸構造が、北宋開封の宮城構造に影響を與えたと述べられる。同氏主編『中國古代建築史二——三國、兩晉、南北朝、隋唐、五代建築——』第三章第二節（中國建築工業出版社、二〇〇一年）。また、前掲註(2) 拙著第二部第一章參照。ちなみに、文明殿を中心とする洛陽宮中軸線西側の殿宇が、唐代則天武后時代から重視された點については、鈴木亘氏「中國の宮殿建築における前殿および朝堂（Ⅰ）」〔Quadrato〕II、一九八〇



年)に指摘されている。

(19) 前掲註(5) 苗書梅氏論考参照。

(20) 『五代會要』卷一七、御史臺に、

天成元年(九二六)十二月十一日、御史臺奏。本朝舊例、合行公事、如後。〈中略〉應諸道節度、觀察、防禦、經略、團練使、及諸州刺史、新除赴任、及郎幕上佐官等得替、及准宣、進奉到闕、及歸本道。竝合廊參、正衙謝見辭。

とあり、「郎幕上佐官等、得替し」とあるのは、任期満了して京師に歸ることであり、彼らは「正衙にて謝見、辭」するとあり、また同書卷六、輟朝雜錄、天成三年(九二八)十一月十一日の條に、「舊例、節度使の新除中謝、及び罷任闕に赴いて朝見」とあり、これらは唐代の舊制であるとしている。なお、五代の例であるが、同書卷六、諸侯入朝に、

後唐長興元年(九三〇)七月敕。諸道得替防禦、團練等使、及刺史、到京朝見後、竝宜于班行比擬。

とあって、節度使より格下の地方長官防禦・團練使・刺史も交替の際に京師に歸り朝見している。

(21) 前掲註(3) 拙稿参照。

(22) ソグド人を中心とした異民族と五代の王朝・藩鎮情勢については、森部豊氏『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(關西大學出版部、二〇一〇年)所載の諸論考参照。

(23) 後、明宗的天成元年(九二六)五月より、朔日の他に望

日も入閣することになった。『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二に、

乙酉、敕。毎月十五日賜廊下食。本朝承平時、常參官每日朝退、賜食廊下、謂之廊食。自乾符亂離已後、庶事草創、百司經費不足、無每日之賜。但遇月旦入閣日賜食。帝初即位。始因諫官疏、奏請文武百寮五日一起居、見帝於便殿。李琪以爲、非故事。以五日爲繁、請每月朔望日、皆入閣、賜廊下食、罷五日起居之儀。至是、宣每月朔望、皆入閣、依奏。五日一度起居、不得停廢。遂以爲常。

とあり、明宗天成元年以前、入閣は月一度で、五日一度起居が始まるのはやはり同年なので、常朝の「宣不坐」が常態化しているのであれば、莊宗朝で百官が皇帝に見えるのは、月一回となる。

(24) 引用文に従うと文武三品以上の高官や親衛軍將校は常朝に参加しないことになる。軍人はともかく、三品以上の高官の常朝を免除すると、後述する百官の班序を管理する押班宰相が存在しなくなる可能性があり、いささか不自然である。押班宰相の常朝出席は自明であり、この奏議に言及されていない可能性があるが、やはり釋然としないものがある。恐らく、ここで挙げた制は莊宗朝の一時期的ものであるう。

(25) 前掲註(3) 拙稿所掲表3参照。

(26) 『五代會要』卷五、朔望朝參は五月三日としている。天成元年五月は丙辰朔なので、丁巳としている『冊府元龜』

卷一〇八、帝王部、朝會二・『舊五代史』卷三六、唐書一二、明宗紀二・『資治通鑑』卷二七五に從う。

(27) 『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二。

(28) 冬至朝賀・五月一日ともに『五代會要』卷五、受朝賀。

(29) 括弧内の朝儀の殿宇については、前掲註(3) 拙稿參照。

(30) 原文は「格通規」だが、『冊府元龜』卷五九四、掌禮部、奏議二二、天福五年五月條に「立通規」とあるのに從う。

(31) 前掲註(30)、同書同條の明版には「崇行異位」とあるが、文淵閣『四庫全書本』では「同行異位」、文津閣『四庫全書本』では「崇行異位」、宋本では「重行異位」とある。『宋史』卷一一六、禮志一九、賓禮一、熙寧六年(一〇七三)正月條には、

請、遇垂拱殿百官起居日。將親王以下十班、合爲四班。

親王爲一班。侍衛馬步軍都指揮使爲一班。皇親使相以下至刺史、重行異位爲兩班。可減六班。

とあるので「重行異位」を採用し、班列を分かち並ぶ意味にとつた。

(32) 『五代會要』卷六、輟朝雜錄には「假内横行」とあり、『冊府元龜』卷五九四、掌禮部、奏議二二は「假滿横行」とある。横行とは休暇明けの參上なので(『宋史』一一六、禮一九、正衙常參の條)、「假開」或いは「假滿」が正しい。

(33) 正衙辭謝は百官序班する中での齊拜であり、内殿中謝は唐制から想定すると個別的な面對にあたると思われるが、その場にも等差が存在した模様である。表117に、

〈天成〉三年十一月十一日、中書舍人劉贊奏。往例、

應諸道節度使、及兩班大僚。凡對明庭、例合通喚。近日全廢此儀。伏乞、特詔所司重定向來格品。若合通喚、准舊施行。中書帖四方館、令具事例、分析申上。據狀稱、舊例、節度使、新除中謝、及罷任赴闕朝見、合得通喚。文班三品已上官、武班二品已上官、新除中謝及使回朝見、亦合通喚。從之。

とあり、中謝官は「通喚」するとある。ここである「通喚」の故事は、大唐文宗のそれであろう。『唐會要』卷六八、刺史上に、

〈開成〉三年(八三八)三月敕。新授刺史、如遇入闕申謝者。其日、各隨本班引入、候班退。刺史便接次對官立。候次對官班訖、通事舍人引至橫階前。通事舍人口奏云、新授某州刺史某人等申謝。如喚近前、即引上龍墀。如不喚、即各自奏發日訖。通事舍人即宣、某人等申謝。如去、贊拜訖、使引出。

とあり、紫宸殿で謝官する場合、皇帝が對談の要を認めた官人は御前近くに喚ばれた。大唐の入閣は紫宸殿の常朝であるが、それは五代の常朝と違い實際に百官が見えるものであった。明宗朝の中謝では、一部の高官に「通喚」の待遇を與え直接皇帝と會話したものとされる。表111・4で兩使判官・州縣の令・錄が中謝を許されているが、前記天成三年十一月十一日の條によると、これらの官は「通喚」に該當しない。恐らく該當者が多いので一人一人言葉を交わしたのではなからう。

(34) 五日に一度内殿で起居(様子を訪ねる挨拶)するとは實

質朝會儀禮であり、本稿では、以降の記述で「五日起居」と簡稱する。「起居」の語がもとと家庭内の父母に對する挨拶から朝廷の朝參の呼稱へと變化する様は、前掲註(7) 吳氏C第九章第二節參照。

(35) この一文、『冊府元龜』卷五一七、憲官部、振舉二は「固不傳宣命」とあり、便の字が無い。

(36) 『新五代史』卷五五、雜傳四三、盧文紀傳。

(37) 『舊五代史』卷五八、唐書三四、李琪傳は、御史大夫とし、『新五代史』卷五四、雜傳四二、同傳は、御史中丞とする。陳尚君氏『舊五代史新輯會證』(復旦大學出版社、二〇〇五年)一八六五―一八六六頁は兩書の記載の相違についてコメントしていないが、氏の引用する『冊府元龜』の記述に従い、御史大夫とした。

(38) 「隔門辭謝」とは、前掲註(7)の『刺史書儀』によれば、恐らく文明殿の脇門である上閣門外で拜禮するものである。勿論、この場に皇帝は不在だから一種の遙拜儀禮である。『冊府元龜』卷五一七、憲官部、振舉二(表1-3の『五代會要』卷六、輟朝雜錄とほぼ同文)に、

〈天成元年〉八月。御史臺奏。凡新除官、及差使者、合於正辭。每遇內殿起居日、百官不於正衙敍班。其差使、及新除員、其日辭謝不得。或恐差使者、已定發日、除官者、准宣催發。以一日無班、便妨辭謝。臣愚參詳、每內殿起居日、百寮先敍班於文明殿庭。候辭謝官退、則班入內殿。冀便於官吏辭謝者。從之。

とあり、内殿(五日)起居の日に謝官するようになったの

は天成元年八月である。その理由は、使者の發遣や、任官者が特に皇帝の命(宣)によって赴任する際に、辭謝の機会が無いのを防ぐためであった。この奏議に「隔門辭謝」が見えないのは、起居の日に辭謝すれば、その必要がないからであろう。恐らく「隔門辭謝」とは、こうした特殊の事情がある個別の官人が行うもので、南班における辭謝官の一齊拜謝とは異なる。本文bにみえる「祇候において宣放せしむ」とは、宰相を祇候する場において特に辭謝を免

じる宣を出したのである。先の「隔門辭謝」にて皇帝の宣が出されたか否か微妙であるが、これらが特例として同様の扱いを受けていたら、やはり宣を受けて門を隔てて辭謝していた可能性がある。いずれにせよ、これらの制度は急切公事の際に個人に出される特例である。本文で述べたように、十二月の段階で「宣」無しの辭謝は不都合と考えられ、八月の制は改められた。つまり本文後段で述べるように、拜謝の前提には宣が必要だと認識されたのである。

(39) 前掲註(2) 拙稿參照。

(40) 以下に表1で示した『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二の原文を挙げる。なお『五代會要』卷六、輟朝雜錄にほぼ同文が掲載されているが、かなり字句の異同がある。〈内〉内に同書の字句を補うが、下線部は字句の異同、下線部の無い〈外〉は同書によって補入したものである。

三月庚子。詔。閣門陳〈奏列〉内外官吏對見例。應諸州差判官、軍將、貢奉到闕、無例朝見。以名御〈銜〉奏、放門見、賜酒食得回〈廻〉。詔。進勝子、放門辭。

臣、今後欲只〔祇〕令朝見、餘依舊規。應除〔五代會要無〕諸道兩使判官、推〔官〕、巡〔官〕、無例中謝奏過放謝放辭〔奏遇謝放辭〕。如得替歸京、無例〔朝〕見。臣欲、今後除兩使判官、許中謝、門辭。其書記以下、除替〔新除授及得替〕、請〔竝〕依舊規。應文武朝官除受〔授〕、文五品、武四品已上、并〔竝〕中謝。以〔已〕下、無例對謝。以天成四年正月勅〔敕〕、凡昇〔升〕朝官、新授竝〔並〕中謝。欲以〔准〕此例。〔應〕諸道節度使差判官、軍將進奉到闕。朝見候得同話〔得廻〕、〔詔〕下勝子、奏過、令門辭。應諸道都押牙〔衙〕、馬步都虞候、鎮將、〔得〕替到京、無例見。或在京受〔授〕任、無例中謝、進勝子、放謝放辭〔放謝辭〕。應諸道商稅、鹽麴諸色務官、或在京差補、亦放謝放辭〔放謝辭〕。得替歸京、亦無見例。在京商稅鹽麴、兩軍巡〔使〕、即許中謝。應新除令錄、竝〔並〕中謝、次日放門辭、兼有口宣誠勵。應文武兩班、差中祭使、及告廟祠祭、只〔祇〕於〔于〕正衙辭見、不赴內殿。諸道差進奏官到闕、得見以〔五代會要無〕後、請假得替、進勝子、放門辭。已前六件、望依〔准〕舊例〔施行〕。從之。

文中に頻見する「門見」「門辭」であるが、字義からすると正殿の門前での儀禮で殿庭ではない。兩使判官の場合、中謝と門辭が竝んでいることから明瞭である。北宋の事例であるが、『續資治通鑑長編』卷七六、眞宗大中祥符四年（一〇一一）十一月の條に、

辛巳、詔。自今知貢舉及發解官、竝令門辭、遣官伴送入院。不得更求上殿、及進呈題目。

とあり、門辭にとどめ上殿は許さなかったとある。もちろんこのような次要の場に皇帝の出御はなかったであろう。なおこの門は前掲註（15）で言及した『刺史書儀』によれば東上閣門であろう。

（41）括弧内の地方長官は、表1-6に正衙謝見辭するとあるが、同項に節度使も含まれており、節度使以外は正衙辭謝のみと考えるのはやや不合理である。また前掲註（7）吳麗娛氏論著には、『刺史書儀』を検討されて節度・觀察使・刺史等を中謝官とされている。實際、同書には、「朝見記事」として皇帝御前での拜禮儀注が記されているので吳氏の説に従う。『五代會要』卷六、開延英儀にはこれらの官が中謝するとあるが、後述するように同記事が五代の制を忠實に反映したものであるか疑わしいのが悩ましい点である。

（42）表1-15・20の諸州・節度使が差する判官・軍將の進奉使は、京師を辭する時の儀禮で、任官謝恩では無いので、ここでは挙げなかった。21・22・26は殿宇・門での謝恩儀禮を免除されている。

（43）文中括弧内の官品は『大唐六典』に基づく。

（44）常參官とは、五品以上の職事官・八品以上供奉官・尚書員外郎・監察御史であり、八品以上供奉官とは、起居郎・起居舍人・通事舍人・左右補闕・左右拾遺・侍御史・殿中侍御史に相當する。『大唐六典』卷一、尚書吏部郎中の條。

本文で引用した天成四年の制では、唐制には含まれていた通事舍人が缺けている。

- (45) 註(2)、拙著参照。唐代における中央官の中謝の實例は、拙著六七頁に一覽表を挙げた。ただし、京兆・萬年の京師兩縣令が唐末に延英殿で中謝していたことについては見逃していた。前掲註(7)、吳麗娛氏A論著五五六頁參照。また、後述する『五代會要』卷六、開延英儀の中謝官が大唐の故事である可能性が考えられる。

- (46) ただし京師兩縣令は唐代から中謝していた。前記註(45) 參照。

- (47) 『五代會要』卷一七、試攝官に、本文の「敕す、朕方めて區字を平ぐるを以て」以下の明宗の敕とほぼ同様の敕文を載せ、十月十六日の記事としている。しかし、『冊府元龜』卷四七六、臺省部、奏議七、清泰二年の條引く敕文及び『五代會要』卷一九、縣令上の條は令・錄の内殿辭謝の部分のみ記載して八月にかけている。前段の令・錄の辭謝に關する敕と、後段の敕文が時期の離れたものである可能性がある。筆者は、前記『冊府元龜』卷四七六、臺省部、奏議七・『五代會要』卷一九、縣令上の條に従い、令・錄の内殿辭謝の改制は八月になされたものと考ええる。なお引用文中の(へ)内の補訂文は前記『五代會要』卷一七、試攝官に基づく。

- (48) 『通典』卷一五、選舉三、歷代制下、大唐に、「凡制、勅授及冊拜、皆宰司進擬。自六品以下旨授」とある。引用文中の「除授」とは具體的に如何なる手續か不明であるが、

吏部銓選の擬官でないことは確かであろう。畑地正憲氏は、藩鎮の幕職官の任命方法が後唐の天成三年(九二八)に、除授・旨授・辟召の三段階に區分されることになったとされ、このうち「除授」とは、「藩帥・州長の人選・推薦に基づいて中央政府は人事を追認するものとして、除授(任命)したもの」とされる(同氏『宋代軍政史研究』北九州中國書店、二〇一二年、二五頁)。筆者が本文で扱った令・錄は幕職官ではなく縣・州の官であるが、前掲天成元年敕文では、藩鎮が登用する「攝官」(畑地氏前掲書二四頁)と對比されており、地方の推薦に基づくもの、或いは朝廷の發動した人事いずれにしても、「除授」を最終的に宰相府の擬官・任命によるものと考えた。

- (49) 嚴耕望氏「唐代府州僚佐考」(『唐史研究叢稿』、新亞研究所、一九六九年)・同氏「唐代府州上佐與錄事參軍」(『嚴耕望史學論文選集』、聯經出版事業公司、一九九一年、初出一九七〇年)。なお乾元元年の官品の上昇であるが、中華書局點校本『通典』(王文錦氏編、一九八八年)には、卷三三、職官一五、總論郡佐の一品加進の記事について懷疑的な注記がされている(同書九二八頁)。筆者は『唐會要』卷六九、判司などの史料で補強されている嚴氏の見解に従っておきたい。嚴氏の令・錄を評價される見解の一方、日野開三郎氏は、五代の縣令は鎮將に權限を奪われて、ほとんど虚設であったと力説されている(前掲註(4) 論考)。錄事參軍はともかく縣令が有名無實だとすれば、中謝における重視をどう解釋すべきであろうか。畑地氏は五

代後唐期より縣制の再建が政治課題として推進されたことを論じられている（前掲註（48）同氏論著二六・二九頁及び七二・七七頁）。本文で提示した中謝の「令・錄」重視は、大唐の觀念に由來する單に形骸化した制度であるのか、それとも朝廷の梃子入れの努力の一端であつたのか、五代の地方統治の實態を解明する必要があるが、後考に期したい。

（50） 室永芳三氏「五代時代の軍巡院と馬歩院の裁判」（『東洋史研究』二四・四、一九六六年）参照。

（51） 前掲註（2）、拙著参照。

（52） 『冊府元龜』卷一九七、閏位部、朝會に、梁太祖開平元年（九〇七）十月癸酉、御史司憲薛廷珪奏請。文武百官、仍舊朝參。先是、帝欲親征北虜、命朝臣先赴雒都。至是、緩其期、乃允所奏。宰臣請、每月初入閣、望日延英聽政、永爲常式。

とあり、『冊府元龜』卷一八一、帝王部、無斷に、『同光』四年（九二六）三月壬戌、《中略》宰臣延英奏對、每請出內府財以給諸軍。帝將行之、尋爲劉后所沮而止。

さらに、『五代會要』卷六、常朝に、

天成元年（九二六）五月十九日、敕。本朝舊日、趨朝官置待漏院。候子城門開、便入立班。如遇不坐、前一日晚、便宣、來日兩衙不坐。其日纔明、閣門立班。便宣、不坐、百官各退歸司。近年已來、雖遇不坐正殿、或是延英對宰臣、或是內殿親決機務。所司不循舊制、

往往及辰已之時、尙未放班。服日色已高、致人心疲倦。今後若遇不坐日、未御內殿前、便令閣門使宣不坐、放朝退班。

とあるので、明宗朝までその存在が確認できる。

（53） 『舊五代史』卷四一、唐書一七、明宗紀七及び礪波護氏「三司使の成立について——唐宋の變革と使職」（『唐宋の變革と官僚制』、中公文庫、二〇一一年、初出一九六一年）参照。

（54） 盧文紀の奏議は『冊府元龜』卷三二四、宰輔部、謀猷四参照。吳麗娛氏は、五代の節度・觀察使・刺史謝官の儀は基本的に大唐に準據し、『五代會要開延英儀』は製作時期が不明であるものの、内外中謝官の範圍は基本的に唐朝と同じで、五代（後唐の可能性が強い）で抄録された、もしくは繼承された唐朝の禮制ではないかと推定されている。前掲註（7）A『唐禮摭遺——中古書儀研究』五五八頁。

（55） 『資治通鑑』卷二六二、天復元年（九〇二）正月の條に、丙午、敕。近年宰臣、延英奏事、樞密使侍側、爭論紛然。既出、又稱上旨未允、復有改易、撓權亂政。自今竝依大中舊制、俟宰臣奏事畢、方得升殿、承受公事（大中故事。凡宰相對延英、兩中尉先降、樞密使候旨殿西、宰相奏事已畢、樞密使案前受事）。

とあり、同書同卷同年十月の條に、

癸卯、《護軍中尉》韓全誨等、令上入閣、召百官（百官自閣門入、見於內殿、謂之入閣）、追寢正月丙午敕書（丙午敕書、依大中舊制、見上）。悉如咸通以來近例。



是日開延英、全海等即侍側、同議政事。

とあって、大唐の制では、護軍中尉が退去し、樞密使が奏事の場を離れるか（大中故事）、宰相とともに議論するか（咸通以來近例）どちらかであった。本文引用の「開延英儀」では、樞密使が御座の左右に控え、「其餘の臣僚」が場を離れるとされる。ここである「其餘の臣僚」とは、恐らく、大中故事で、「殿西に旨を候う」大唐樞密使の立場を繼承したものであり、五代でそれに相當するのは、宣徽使などの、樞密使以外の内諸司を中心とする臣僚であろう。つまり、本文の「開延英儀」の樞密使以下の動作は、内諸司のうち、樞密使のみを宰相の奏事に立ち會わせ、その他の臣僚を排除することであり、大唐の二つの故事を折衷したものである。ちなみに護軍中尉が登場しないのは、この「開延英儀」が大唐の制ではないことの一證左である。この「資治通鑑」卷二四六、會昌元年（八四一）三月丙申の條に、宰相李德裕が延英殿において、武宗皇帝が舊相楊嗣復・李珣を誅殺する企圖を諫止した状況を記して、

至晡時、開延英、召德裕等入。德裕等泣涕極言、陛下宜重慎此舉、毋致後悔。上曰、朕不悔。三命之坐。德裕等曰、臣等願陛下免二人於死、勿使既死而衆以爲冤。今未奉聖旨、臣等不敢坐。久之、上乃曰、特爲卿等釋之。德裕等躍下階舞蹈、上召升坐。

とあり、武宗が賜坐を命じたのに對して、李德裕達は敢えて座らないことで抗議の意を示した。唐代では宰相が延英殿で座して議論するのが通例であったことが分かる。

(57) 前掲註(54) 及び前掲註(7) A論者參照。

(58) 〈〉内の年號以外の字句は『冊府元龜』卷六六、帝王部、發號令五によつて補訂した。同條には、以下の如く違反者の個人名を擧げてゐる。また同書は、廣順四年（九五四）に繫年しているが、日附まで記している『五代會要』に従う。

十月、勅。御史臺勘成、除官不謝、不赴任人、孟翰、裴韶、賈贍、程範、崔中庸五人。放罪勒赴任。麗延祚、李玫。准元勅、殿選。

(59) 正衙謝は衙謝と略稱された。『宋會要輯稿』儀制九一一・一四參照。

(60) 恐らく前章で述べた天成元年十二月三日の敕（表1-5）の「宣放」がそれにあたる。

(61) 五代の皇帝權力の消長に對する概説としては、啓蒙書であるが栗原益男氏『亂世の皇帝——後周の世宗とその時代——』（桃源社、一九七九年）が詳しい。

(62) 最終的に正衙常參が廢止されたのは、北宋の元豐年間である。『文昌雜錄』卷三、元豐四年（一〇八一）始罷正衙常參の條、『續資治通鑑長編』卷三三〇、元豐四年十一月己酉の條及び『宋史』卷一一六、禮志一九、賓禮一、常朝之儀參照。

(63) 『唐會要』卷五七、翰林院

〈長慶四年八二四〉其年十月、翰林院侍講學士諫議大夫高重、侍講學士中書舍人崔郾、中書舍人高鉞、於思政殿中謝。崔郾奏、陛下授臣職以待講、已八箇月。未

嘗召問經義。臣內慙尸祿、外愧羣僚。上答曰、朕機務稍閒、當召卿等請益。高鉞對曰、意雖求治、誠恐萬方或未之信。若未加躬親、何以示憂勤之至。上深納其言、各賜錦綵五十匹、銀器二事。

とあり、岑仲勉氏「翰林學士壁記注補」(同氏「郎官石柱題名新考訂」上海古籍出版社、一九八四年所收、初出一九四八年)によると、高重・崔郾・高鉞の三名はいずれも、諫議大夫・中書舍人などの兼任している外朝官が遷轉した時の中謝である。また、岑氏は、『唐會要』の十月は十二月の誤りとする。ちなみに崔郾については、『冊府元龜』卷五四九、諫諍部、褒賞、崔郾の條に、

崔郾爲給事中。敬宗即位、選爲翰林侍講學士、轉中書舍人、入思政殿謝恩。

とあって、先の『唐會要』の記事と合わせると、翰林侍講學士在職中に、給事中から中書舍人へと帶職の外朝官が遷轉した際に中謝したことが明瞭である。これに對して翰林學士充職を契機に中謝することを全く想定できないとはいえないが、管見の限りではそうした史料はない。

(64) 前掲註(4)、李全德氏論著參照。

(65) 『宋會要輯稿』儀制九之一。

(66) 本稿では紙幅の都合から史料が比較的殘存している洛陽

宮について考察し、開封の中謝の場については、後日に期したい。

(67) 前掲註(2)拙著參照。

(68) 『冊府元龜』卷一〇八、帝王部、朝會二には、十一月己巳、御史臺奏。前任節度、防禦、團練使等、刺史、行軍付使。近儀、五日一度內殿起居、皆綴班敍立。元係班簿、雖曰便殿起居、其遇全班起居時、亦合綴班。從之。

とあり、「毎日」とは記していないが、奏議の意味するところは本文引用の『舊五代史』の記事と同じであり、文中の「便殿起居」が毎日であったことを積極的に否定する根據にはならない。

(69) 前掲註(61)栗原氏論著參照。

(70) 前掲註(7)の吳麗娛氏の『刺史書儀』に關する諸研究には、地方長官をめぐる儀禮の聯鎖を説得的に論じられている。ただ氏の基本的見解は皇帝權力の低下と、それに反比例して擡頭して來た藩鎮勢力の僭上の方に力點が置かれており、筆者とは觀點が異なる。

(71) 前掲註(6)平田氏論考參照。

(72) 前掲註(2)及び(13)拙著・拙稿參照。



ON THE RITES OF APPRECIATION IN COURT CEREMONY  
IN THE FIVE DYNASTIES ERA : *ZHENGYAXIE* 正衙謝  
AND *ZHONGXIE* 中謝

MATSUMOTO Yasunobu

The morning assembly 朝會儀禮 was an important rite, visualizing the hierarchy between the emperor and his subjects and confirming it corporally in physical behavior. In the Tang era, the *changchao* 常朝 (daily deliberations in the imperial court) already existed, but they had never been clearly described in historical sources, and the *Songshi* was the first of the *Twenty-Four Histories* to make it category. Therefore, we must examine the process of changes in the Tang system during the Five Dynasties era. In order to clarify the actual condition of the *changchao*, this paper attempts to examine the rite of expressing gratitude of a newly appointed official, which was celebrated at the morning assembly. The system of the morning assembly, which had declined in the last stage of the Tang era, was resurrected in the court of Emperor Mingzong of the Later Tang. The new version was an orderly system that was not inferior to that of the Tang. The ceremony for expressing gratitude by a newly appointed official was divided into two parts : the *zhengyaxie* 正衙謝 (appreciation in the Regular Court Assembly) and the *zhongxie* 中謝 (appreciation in Inner Court Assembly). The former was a formal rite in which the emperor was not present, and the latter was a rite at which the emperor actually gave audience. Officials who held important posts in either the central or local government attended both. In particular, the attendance of low-ranking, local officials such as the *lushicanjun* 錄事參軍 (administrative supervisor) and *xianling* 縣令 (county governor) at the *zhongxie* shows the emperor's interest in local control. On the other hand, one must ask why the *changchao*, at which the emperor was not actually present, was celebrated throughout the Five Dynasties era? This is because the authority derived from the celebration of a rigorously observed rite was especially required during the Five Dynasties era when the power of the emperor became unstable. On the other hand, it is probable that policies were actually decided on a daily basis at conferences between the emperor and small number of ministers in the inner court. Separation of morning assembly and the *tingzheng* 聽政 (Imperial Council) marked a division of authority and power, a suitable response to the confusion of the Five Dynasty era.